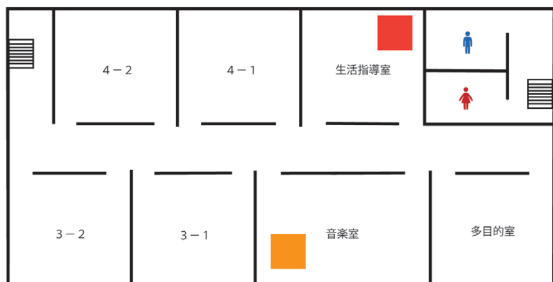
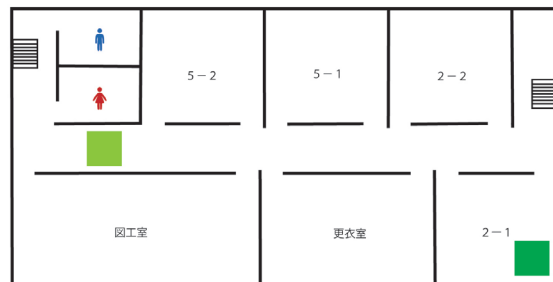


# 7 こ

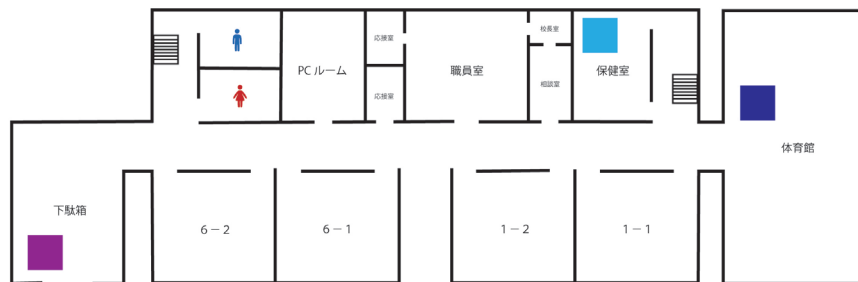
く忘れられないウツく



2F



3F



1F

## 2年1組

「黒板を写し終わった人から、校庭に遊びに行っておいで」  
担任の穏やかな声が、教室に響いた。

サンカク小学校2年1組の教室には、その声が鶴の一声のように響き渡り、じっと座っていることに飽きていた子供たちは、大慌てで鉛筆を走らせ、我先にと教室を飛び出していく。

つまらない授業にただひたすら時間がすぎるのを待っていた私も、はやく校庭で遊びたくてうずうずとして、鉛筆を手にとったが、ノートをみて思わず頭を抱えることになった。

目の前のノートは、落書きだらけで、みるも無残な姿をしていた。  
45分間、まったくノートを写していなかったのだ。

急いで黒板を見たが、既に一番はじめの板書は残されていないかった。

私は途方に暮れてしまった。

ひとり、またひとりとクラスメイトたちは校庭へと飛び出していく。

気がつくとき、教室には私と担任の二人が取り残されていた。

校庭で遊びたいというワクワクとした気持ちはずっかり影を潜め、たった一人取り残された心細さと、一切ノートを書いているなかったことへの罪悪感に私はだんだんと耐えられなくなっていた。

気がつくとき、私は鉛筆を筆箱に乱雑にしまい、ノートは乱暴に机の中に押し込んでいた。

ノートは写し終わったことにしよう。

きつと気づかれなければ叱られることもないだろう。

そう考えた時、ふと罪悪感で頭が真っ白になった。

本当にいいのだろうか。

そう思案した時だった。

「ノート、本当に写し終わりましたんですか？」

唐突に担任の声が隣から聞こえてきた。

普段、生徒には「ですます」口調で一切話しかけない担任の静かな口調に、

私は恐る恐る声が出た方を見た。

バチッと音を立ててあつた静かな眼差しに、私は凍りついたようにその場に立ちすくんでしまった。

担任は、窓の手すりに寄り掛かり、私が口を開くのを静かに待っている。

誰がみても、正直に謝って板書に戻るべき状況だった。

しかし、焦燥感に駆られた幼い脳味噌は、どうやってその静かな眼差しを欺けるかということ一杯だった。

私はとっさに平然を装い、必死に声を絞りだした。

カラカラな口からできていたのは、今にも消え入りそうな、

「はい」

という一言だった。

担任は何をいうでもなく、ただ黙って私の目をみつめてきた。

十秒だろうか。二十秒だろうか。もしかしたら一分だったかもしれない。

果てしなく長く感じた担任との見つめあいの間、私は必死に担任の目を見つめていた。

しばらくして、担任は表情をかえずに、

「そうなんだ」

と一言、呟くように言った。

私は逃げるように教室を抜け出し、校庭に駆け出した。

担任はもうその場にはいないのに、何故だか酷く居心地が悪い。

私は楽しそうに遊ぶクラスメイトをぼんやりと見つめ、先ほどの授業と同じように、ただひたすら時間がすぎるのを待った。

(2年一組)

## 体育館

「あれ？メガネがない」

水筒の横に置いたはずの、メガネがない。

「目悪いから困るよね？こつち見てあげる。」

「ありがとう助かる」

トモ子にお礼を言いつつ、自分でも探してみる。

まあ、何も見えないからあんまり意味無いんだけど……。

「こつちにはないよ」

「こつちもない……」

「どこ行っただらうね。あ、ポケットとかにはない？」

「ない。さっきまであったはずなんだけど。うわ、集合かかった」

「見えないのに、ここからのドッジボール怖すぎない？大丈夫？」

「うーん、外野でサボっとくよ」

そう言つて、一瞬薄暗くなつた気持ちを誤魔化すようにトモ子を促した。

メガネが無いと、これからの授業で困るんだけどな。

そう思つて、ため息をつく。

無抵抗&棒立ちした結果、狙い通り早々に外野に出た私は、ボールから逃げようの後ろの方に突つ立つていた。

ふと、視界の端に大きな人影が映つた。

同じクラスの上橋だ。

泣きそうな顔でこつちに向かつてくる上橋に、若干、いやかなりドン引く。

なんの用事だろう。

身構えていると、ごめん、と言われた。

ポケットに手をつ突つ込んだ上橋が取り出したのは、私のメガネだった。

「マジでごめん、これお前のだよな?」

突き出されたメガネに、違和感を感じる。

よく見ると、片方のレンズが外れていた。

しかも、とても綺麗に。

ツルの部分も、心なしかひしゃげているような気がする。

流石にびつくりしていると、上橋が申し訳なさそうに口を開いた。

「気づかなくて・・・メガネの上に座つてしまつて。」

座つた?メガネの上に?

「え、嘘でしょ?」

上橋を見ると大きな体を精一杯縮こませ、なんともいえない表情をしていた。

こんな大柄な男子に座られては、メガネはひとたまりもないだろう。

その場面を想像すると、どうしようもなく笑いが込み上げてきた。

心底申し訳なさそうに何回も謝る上橋に、気にするなと伝える。

次の授業からどうしようと思案しつつ、あることを心に決めた。

家に帰ったら、母に、机の下に落とした時に誤って自分で踏んでしまったと嘘を吐こう。

あとトモ子も誤魔化さないと・・・。

これ以上、上橋を攻めても仕方ないし。

こうして私は、残りの授業をほとんど音声だけの情報で乗り切きつて、無事、母に嘘を突き通したのだった。

(体育館)



## 下駄箱

あれ、財布がない。

そう気がついたのは、下駄箱で上履きを履き替えようとしている時だった。  
一気に顔が青ざめるのがわかった。

バックの外ポケットにいつもも入れているはずの小型の財布。

財布には定期券が入っていて、学校から家までは2時間近くかかるから、  
定期券がないと帰れなくなってしまう。  
どうしよう。

無くした？

お母さんになんて言い訳する？

・・・いや、その前にどうやって帰ろう。

どうしよう、どうしよう。

・・・いや、ここは一旦落ち着こう。

部活のない日だから、まだ学校にはたくさんの生徒も先生たちも残っている。自分を落ち着かせるように深呼吸をした。

とりあえず教室、部室など少しでも可能性のある場所を探してまわる。

何回も繰り返し確認しているのに、お財布はどこにも見当たらない。

可能性が残されているのは、職員室だ。

最後の望みにかけて、私は歩き出した。

廊下を歩くうちに、頭の中に1つの可能性が浮かび上がった。

さつき教室を出た時、私をみてヒソヒソと何か喋っていたグループがいた。

単独行動の多い私を、いつも小馬鹿にしているようにみてるあのグループ。

クラス内でグループ分けがあると、いつも私と組むメンバーが可哀想だとか、

余計なことを言ってくるあのグループ。

必要以上に絡むといいことがないから、普段から見ても見ぬふりをしている。

・・・まさか。

あのグループだったら、財布もだつて盗つて隠しかねないかも。

でもまさか、そんな典型的ないじめらしい行動をしてくるはずがない。

証拠もないのに、疑うのは良くない。

そう自分にいいかせているのに、一度頭に浮かんだ疑惑は、何度振り払って

も頭から消えてくれない。

それどころかどんどん膨らんでいく。

どうしよう。

よくない思考回路に陥ってしまっている・・・。

「珍しいな、どうした？用事か？」

気がつくど、目の前に学年主任が立っていた。

ちやうど職員室に帰ってきたらしい。

お財布を落としたかもしれないこと、職員室には届いていないか聞きに来たこと。

疑惑でいっぱいの内心とは裏腹に、疑惑を一切交えずに言葉がスラスラと出てくる。

よかつた。

あくまで疑惑なんだから、これで間違っていない。

そう思っつて、ほっとしていると、落としものを確認してくれたらしい学年主任が戻つてきた。

「届いていないぞ。お前、電車通学なのにどうするんだ」

・・・マジか。

最後の望みを絶たれてしまった。

じゃあ、やっぱりあの人たちが盗つたのかな。

せつかく、信じようとしていたのに。

そう思うと、例のグループに憤りを感じた。

相当深刻な表情をしていたらしい。

「・・・とりあえず、交通費は貸してやるから、それと、念の為に聞くが、誰かに獲れられたとかではないよな・・・？」

そんな言葉に、なんとか抑え込んでいた疑惑が、口をついて出てきた。

「・・・盗られたのかもしれない」

私は話を聞かれた後、先に帰されることになった。

遠距離通学は大変だけど、こんなメリットもある。

ふと向かい側の教室では例の集団が呼び出され、担任から事情聴取をされている。

素知らぬ顔をして、そつと廊下を通る。

ところが、ふと、一番折り合いの悪い男子と目が合ってしまった。

ぞつとするような憎しみのこもった眼差しを向けられる。

その瞬間、自分の中で葛藤が完全に消え去ったのを感じた。

・・・なんで？悪いのはアイツじゃない。

そう思うと腹が立って、私は睨み返し、嘲笑を浮かべてみせた。

・・・ざまあみろ。

私は悪くない。

今度こそ、帰ろう。

靴を履き替えるために、手に持っていた交通費の入った封筒を、とりあえず一旦下駄箱に置く。

靴を履き替え、下駄箱に突っ込もうとすると、ふと何かがつかえている感触がした。

恐る恐る下駄箱を覗くと、そこにはあるはずの無いものがあつた。

無くしたはずの、例の財布が。

一気に顔が青ざめた。

そういえば今朝は、学校についてからまず購買部にいったのだ。

それから、今みたいに靴を履き替えるために下駄箱に寄つた。

そうだ。あのとき、財布をこの封筒のように一度下駄箱においたのだった。なんていうことだろう。

要するに、全部私が一方的な被害妄想をしてしまっただけなのだ。

あのグループは、いっさい無関係で・・・。

やっぱり疑惑は疑惑だった。

今すぐ、戻って謝らないと。

そう思うのに、足が鉛のように重たく、踏み出すことができない。それどころか、私は靴を履き替えて何事もなかったかのように校門へと歩き出した。

財布が見つかって解消されたはずの、あのグループへの憤りだけが、いまだに心の中で荒ぶっている。  
いい機会だ。思い知らせてやろう。

私は、そんな悪魔の囁き声に負けてしまった。  
墓までこの嘘を持っていこう。

そう、大袈裟のような誓いを胸に、私は学校を後にした。

(下駄箱)

## 音楽室

いつだったか、私は友人にこう自慢したことがあるらしい。

記憶からは都合よく忘れ去られているが。

「4歳からピアノ習ってるの。今度発表会で、キラキラのドレス着るんだよ。」  
この発言が後々自分を苦しめることになることを、この時の私はまだ知らない。

1週間前、事件が起こった。

この学校では、年に一度、合唱コンクールが開かれる。

伴奏者が急に転校することになり、順調に練習が進んでいたクラスに衝撃が  
はしった。

この時点で、本番まであと1ヶ月。

「せめて合唱コンクールの後にしてほしいって思ったんだけど無理っぽくて」

当然、クラスは大騒ぎになった。

合唱コンクールまでのこり1ヶ月、伴奏者を探すにはぎりぎりのタイミングである。

大慌てで、立候補者を募ること3日。

当たり前だけど、誰も現れない。

「ミスしても誰も怒らないから、誰か立候補してくれませんか？」

音楽の授業中、必死で訴えかけるクラス委員に、音楽室が申し訳なきような空気で満たされていく。

「みーちゃん、ピアノ習ってなかったっけ？」

誰かがポツツと発した言葉に、クラス中がみーちゃんに注目した。

「・・・リンちゃんも習ってたよね？」

焦ったみーちゃんがリンちゃんに話を振っている。

2人も伴奏候補者が出現したことで、音楽室の空気は一気に和らいだ。

「だったら1週間後にオーディションにしようよ」

誰かの発言に、みーちゃんとリンちゃん以外は、みんなが賛同する。

みーちゃんとリンちゃん可哀想だなあ。

私はそう思いながらも、のんびりと傍観していた。

あれ？クラス委員がこっちに歩いてくる。

・・・嫌な予感がするかもしれない。

目の前に、目の前に伴奏用の楽譜が差し出された。

「リンちゃんから、4歳からピアノ習ってるって聞いたの」

さっきとは打って変わってニコニコした、クラス委員が言う。

・・・そんなこと、いつ言ったっけ。

「リンちゃん、ちょっとこっちききて」

固まっていると、凛ちゃんと呼ばれた。

「小1のときに言ってたの。一昨年も発表会が近いんだって話してたし」

・・・確かに一昨年、そんなことを言ったかも知れない。  
仲間を増やそうと必死なリンちゃんの言葉に、私の周囲が盛り上がる。  
バシバシと背中を叩かれ、気がついた時に楽譜を手にオーディションの説明  
を受けていた。

それからもう少して、1週間。

「ピアノ弾けそう？どこまで進んだ？」

「・・・まあまあ」

一体どのくらい、昔の発言を後悔したら気が済むんだろうか。

自分の見栄っ張りな性格がつくづく嫌になる。

「そっか。オーディション、明日じゃん」

「ピアノ習ってるなんて知らなかった」

「本当にびっくりしたんだからね」

「すごいね。伴奏に立候補するなんて」

「私もピアノ習ってるけど、伴奏する勇氣ないよ。ほんと尊敬する」

「応援してる！頑張ってるね！」

立候補してないのに、話がどんどん膨らんでいく。

じつとりと汗をかいた背中が気持ち悪い。

明日、どうしよう。

言えない。言えるわけがない。

実は、ピアノなんて習ったことがないこと。

だから、伴奏なんて出来るわけがないという、どうしようもない現実が待っ  
ている。

リンちゃんが羨ましくて、思わず嘘を重ねてきた見栄っ張りな自分を殴り飛  
ばしたい。



5年2組

授業疲れたな。早くお昼食へたい。

「朝井さんが前川のこと好きってほんとなのかな？」  
ナツキ本当に好きだよね、この手の話。

「本当なんじゃない？聞かれた時にめっちゃ照れてたし」

「前川か、私にはかつこよさがわからない」

「それわかる」

「え、でも私は意外とありかもしくない」

私は無理だな、前川は生理的に無理。

「うわ、マジで？」

「キコ、好きそうな感じだもんね・・・」

「でも、ありつて感じて好きではないんだよね」

「そっちか、でも確かにうちの学年だと、前川か山本って感じだもんね」

・・・山本もないな。

「私は断然、山本。ちよつと前川は生理的に無理」

うわ、まさかノンちゃんと同じ見とは。後半だけだけど。

「めっちゃいうじゃん、わからなくも無いけどさ」

「私も山本かな」

「うわ、うちらの中だと山本強いね、ファンクラブ作れんじゃん」

「作っちゃう？」

「いや、そこまででもないわ」

「それもわかる」

「あれ、でもマリ、結構本気で山本好きかもってこの前言ってなかった？」

・・・まじか。

「え、まじか？」

「本当はどうなの？」

「・・・否定はできない」

「・・・やばー！」

「まじかー！」

「え、応援するー！」

「・・・山本そこにいるから、とりあえず告つてきたら？」  
うわ、雑だ。ナツキそいうとこだよ。言わないけど。

「え・・・？」

「いやいや雑すぎだよ」

「とりあえずって」

「びっくりしたじゃん、心臓止まるかと思ったよ」

「今、マリすごい顔してたよ」

「え、応援するー！」

「・・・山本そこにいるから、とりあえず告つてきたら？」

うわ、雑だ。ナツキそういうとこだよ。言わないけど。

「え……？」

「いやいや雑すぎだよ」

「とりあえずって」

「びっくりしたじゃん、心臓止まるかと思ったよ」

「今、マリすごい顔してたよ」

「ナツキそういうとこだよ」

「……あ、チイちゃん言っちゃった。ナツキ気にしなさそうだからいいけど。

「やっぱり？」

「おもしろすぎる」

「……ところで。君は誰派なの？」

「……なんだいきなり。」

「ナツキもマリもノンちゃんもチイちゃんも聞いたし、私もいったし」

「私も気になる。全然聞かないし」

「あ、いないとか言わないでね」

「うんうん、誰か絞り出して」

「……いや待て。なんで？」

「え、誰だろう」

「……その前に、本当に誰もいないんだって。正解の答えがわからない。

「とりあえず、前川と山本どっち派？」

「……どっちでもないけど、どっちかにしたほうがいいかな。そのほうが無難そうだ。」

「バチつとマリちゃんと目が合った。」

「……山本は無しね。大丈夫わかってるから。」

「でも前川は生理的に無理なんだよね。」

「となると……あ、ちょうどいいじゃん。」

「・・・河田かな」

「・・・え？」

「まじ」

「どっちでもないのね、ていうかマジのやつじゃん」

「え、そっだよね」

「思った、マジじゃん」

「まじでびつくりした」

「・・・あれ。」

思っていた展開じゃない。

やらかしたような気がする。

「あ、河田帰ってきた」

「本当だ」

「河田！」

「本当じゃん、河田いるじゃん。河田きてー！」

どうしよう、目が合っちゃった。

「この子、河田が好きなんだって」

うわ、ナツキ言っちゃったよ。

マリちゃんも、目がキラキラしてる。

・・・やば、本当にやばいじゃん。

・・・どうしよう。完全に詰んだ。

咄嗟についた嘘なのに。

教室に入ってきた川田が、偶然ちらつと視界に入ったから言ったただけなのだ。

本当に、本当に、1ミリも好きじゃない。

自分で自分の首を絞めるとはこのことだ。

どうやって切り抜けようか考えながら、私は、もう二度とこんな嘘はつくまいと心に決めた。

## 保健室

今から私は、生理痛に苦しんでいる病人。

今から私は、生理痛に苦しんでいる病人。

今から私は、生理痛に苦しんでいる病人。

うん。大丈夫。

保健室のドアを開けて、出来限り弱々しい声をあげる。

「せんせい、おなかいたい」

「あら、生理痛？横になって休む？」

小声で聞いてくれた先生に黙って頷く。

ベットに潜り込むと、保険室特有のツンツとした匂いがした。

これであの地獄みたいな空間にいらなくて済む。

そう思ったら、ほっとため息が出た。

5年生のクラス替えて、グループに入り損ねた私は、人生で初めてのボツチ生活に突入した。

寂しいけれど隣のクラスに行けば友達もいるし、自由に行動できることに楽しさを感じるようになってきた5月。

遠足で、各々好きに行動班を分けても良いことが決まった。

入れてもらえそうなグループにでも、そっと入れてもらおう。

もしかしたら、遠足きっかけで仲良くなれるかも。

そう思い挑んだグループ分け、当日。

『最悪、こいついらない。誰かさつさと引き取ってよ』

『えー。なんでどこかのグループに入れてっつてお願いしてなかったの。ばかじゃん』

『そっち奇数じゃん。入れてあげたら？』

『むりむり。やめて。迷惑』

考えが甘すぎた。

この空間から消えたい。

もう1度、あの空間にいたら私はきつと壊れてしまう、そう思うくらいにトラウマだった。

今頃、教室では修学旅行のグループ分けをしているはずだ。

相変わらずボツチ生活を送っている私は、クラス内に、組もうと誘う・誘ってくれる友達がいらない。

だからきつと、あの時と同じように、クラスの足を引っ張っているはずだ。

本人不在だから、思う存分厄介者・お荷物扱いもされているんだろう。

修学旅行はよっぽどのがない限り、休むことはできない。

だからきつと、この逃避も気休め程度の意味しかない、ということもわかっている。

ただ、目の前の地獄から逃れることができたことへの安堵しているだけなのだ。

生理痛であると嘘をつき、教室を抜け出していることへの罪悪感も感じながら。

(保健室)

貴方には、忘れられない嘘がありますか？